

重要文化財建造物内田家の住まいと暮らし

坪 郷 英 彦

1, はじめに

国指定重要文化財建造物の内田家住宅は秩父市蒔田891番に位置する(写真1)。蒔田地区は秩父市の西側で、荒川の西岸河岸段丘の地形である。緩やかな傾斜地にはこの地域では珍しい水田が広がる。内田家の歴史を内田家で配布されるパンフレットからひくと、天正18年(1590年)鉢形城落城にともない、領地であった蒔田村に帰農し、姓を藤田から内田に改めたとされる。初代藤田重孝は天正18年に没し、2代内田重賢により内田家が継承され、戸井の口の灌漑用水工事が行われ13町歩が潤ったとある。この灌漑事業に関して寛永17年(1640年)に伊奈半十郎忠治より感状を受けていることから、この頃から水田がこの地区に広がったことがわかる。江戸時代は永代名主の家柄であった。

内田家住宅は昭和46年当主内田龍治郎の時代に国指定重要文化財(建造物)となった。

内田家は解体修理による詳しい建築学的な調査もこれから進められるところであるが、民家の悉皆調査として埼玉県民家緊急調査時の報告がある。筆者は現在の当主内田和幸氏(昭和26年1月15日生まれ)及び妻の真理子氏から住まい方を中心に聞き書きをおこなってきたので、その概要をここで示すこととする。

2, 建築的な特徴

埼玉県民家緊急調査報告から埼玉県の近世から近代にかけての民家形式の特徴を拾ってみる。

埼玉県は昭和44年に県下全域にわたって民家の詳細調査を実施し「埼玉県の民家」としてまとめた。結果として埼玉県の間取りは三間取り広間型が基本形であるとし、古い例として江戸初期に遡る事例も挙げられている。その中で、比企郡入間郡地域には古四間取り型が古くからあり、17世紀から18世紀初め頃三間取り広間型に移行したとしている。

具体的に江戸時代の間取りを見ることができるものとして国の重要文化財指定民家がある。荒川沿いにはその支流沿いも含めて5棟の重要文化財民家がある。荒川本流沿いには中流域にあたる江南町にある平山家住宅、かつては上流域の入り口にあたる野上町にあり、現在は長瀬町に移築保存されている新井家住宅、そして上流域の秩父

市にある内田家住宅の3棟がある。荒川に合流する入間川の支流槻川沿いに位置する小川町に吉田家住宅、同じく入間川支流の高麗川沿いに位置する日高町に高麗家住宅がある。

この5棟の内4棟は保存修理が国の補助事業でなされており、その解体復元工事の過程で建立当初の間取りとその後改変が加えられ間取りが変わって行った様子が明らかにされている。古四間取りは方三間の正方形の主室を持つのが特徴で、日高市高麗家住宅がその典型である。

埼玉県西部に位置する秩父地域も古四間取りの痕跡が残る地域で、やがて広間型三つ間取りに収斂していったというのが大きな流れである（注1）。もう一つの特徴として養蚕による中二階の利用と南面の屋根の切り上げが行われたことである（注2）。この切り上げは群馬赤城型の養蚕住宅の屋根の影響が見られる。

秩父地域に限って文化財民家を挙げると、秩父市蒔田内田家住宅（国重要文化財）、秩父市黒谷内田家住宅（秩父市文化財）、秩父市長瀨新井家住宅（国重要文化財）そして秩父市大滝村神領民家（秩父市文化財）がある。このいずれもが間取り形式からすると、広間型三つ間取りである。

秩父市黒谷内田家住宅は式台を持つ。秩父市長瀨新井家住宅は板葺き屋根の三間取り民家で中二階も含めて養蚕に利用されていたことが知られている。秩父市大滝村神領民家は三峯神社の所領内の民家であったものを移築保存しており、山村民家の簡素な住宅形式を備えている。

これらはいずれも規模的には小型民家に位置づけられるが、秩父市蒔田内田家住宅は大型民家でその規模の大きさに驚かされる。内田家の屋号はホンケで、一渡地区には内田家の分家が多い。近くにある曹洞宗の大慶寺も一渡地区の鎮守である天神神社（天神様）も内田家がこの地に移ってきて創建したとされている。

下吉田と皆野につながる道路は近年行われた圃場整備時に整備され、これを下吉田側から北に車を走らせると緩やかな上り坂の途中に、背後に屋敷林を持つ内田家の草屋根が見えてくる。前面には畑が広がり、母屋向かって右側には蚕室2棟と土蔵1棟が並び、母屋左手には新しく建てられた内田家住居とその北側には現在は使われていない家畜小屋、蚕室（ハウス）、柴小屋がたつ（図1）。

養蚕を盛んに行っていた前当主龍治郎（明治11年生まれ、昭和45年没）の頃は周囲はすべて桑畑で、母屋1階と中2階及び外の蚕室を使って養蚕が行われていた。

母屋の背後に育つ屋敷林には杉、ケヤキの大木が育ち、家の改築等の用材として用意されていた。

図2の平面図は自ら調査したもので、埼玉の民家に掲載された図を基に実見データ

を加えて作成した。

床上が6つの部屋に分かれ、これにヒジロ部分が張り出しているが、痕跡による復元はザシキ部分が北側まで一室となり、広間型三つ間取りの基本形式に床をもつオクリノデエとナカンデエが加わった形ととらえられる(図3)。構造的な特徴は1階前面の縁部分の上にまで中2階床が設け、養蚕のために中二階を広く取る意図がうかがえる。その反対にデエ、ヘーヤ部分は全体を通して中二階が設けられているが、ザシキ部分は女大黒の柱位置までで、それから北側は吹き抜けになっている。また、デイドコ部分には縁と並ぶトボウ入り口部分から北側は男大黒まで中二階が設けられている。養蚕のために中二階を設け広い空間を確保しようとしたことと神様を祀る場所の上にはものを置いたり、人が通ってはいけないという観念からこのような中間に吹き抜けをもつ中二階が作られた。この中二階の用途は意匠的に外観にも反映される。1階縁と入り口部分が壁のない解放された空間であり、その中二階部分は立格子の障子窓を持つ白壁が一直線に並ぶ意匠が結果として生まれた。内田家に向かう正面からの道を進むと独特の雄大で、かつ落ち着いた印象を訪れる人たちに与える。

3. 秩父市周辺の生業と暮らし

荒川上流域の盆地である秩父市周辺は荒川によって形成された段丘と、その中央を荒川が岩盤を深くえぐって流れている。その土地利用はほとんどが山裾の傾斜地で、畑が開かれ、わずかな段丘に用水をひき水田が開かれている。秩父市は荒川の上流域の中心都市である。荒川本流と支流からなるこの地域ではどのような生業の基に暮らしが営まれていたのだろうか。その暮らしの中で住宅はどのような役割を持っていたのだろうか。方法として、秩父市を中心として1年間の生産暦を示し、1年のサイクルの中での生業、年中行事をまず明らかにし、その中で住まいがどのように機能していたかを示す。続いて、年中行事の一つのお稲荷様のお日待ちが毎年内田家の座敷を使って行われる様子を示しながら、村の共同体の中での中心的家とその空間の役割を考察したい。

(1) 秩父地方の生産暦

埼玉県とこれに隣接する群馬県、山梨県は大きな河川沿いを除いて畑作地帯であり、自給用には冬季の麦作、現金収入用として春から秋にかけて養蚕が行われた。秩父地方も例外ではなく江戸時代の地誌「新編武蔵国風土記稿」から、やはり荒川沿いの大淵村を例にみると「男ハ農事ノ隙ニハ薪伐出シ女ハ蚕ヲ養ヒ絹織ル事ヲ生業トス水田一分山林四分陸田五分用水ハ溜井或ハ溪ヲ沃ケリ水旱損ノ患アリ土症ハ真土砂地ナリ土産ニハ絹煙草干柿等ヲ出セリ」と記されている。

蒨田地区から西側の山を隔てたところに品沢地区があるが、この地区の昭和38年頃の生産暦を調査したものがあつる（埼玉の民俗、埼玉県教育委員会発行、昭和41年3月18、210-212）。これを参考にすると、農業の作物は稲、麦、さつまいも、じゃがいも、たばこ、大豆・小豆が挙げられている。稲作は1月の耕起から始まり、11月の脱穀調整で終わる。麦作は10月中旬のコウウンと呼ぶ畑の耕起・土寄せ・種蒔から始まり、6月の取り入れ・脱穀調整で終わる。さつまいもは2月の山柴かき、3月の床作りから始まり、麦の種蒔がおわる11月末に収穫となる。じゃがいもは2月から6月、たばこは4月中旬から8月末、大豆・小豆は5月下旬麦作の間植付けを行い10月中旬に刈り入れとなる。水田、畑での作物作りとともに、養蚕が行われ、飼料として育てる桑畑の管理も行われた。養蚕は春蚕が5月中旬から30日間、夏蚕（初秋蚕）が7月下旬から20日間、晩秋蚕が8月29日から9月下旬の3回行われた。

蒨田地区でも同じ内容の作物作りと養蚕が行われていた。特に住まいとの関連があるのは養蚕である。養蚕は母屋を中心に行われ、飼育量が拡大するにつれ、飼育空間が必要となり、蚕室が母屋周辺に作られた。母屋の養蚕時の使い方は別項で述べる。

（2）年中行事

内田家では住まいを守るとともに年中行事が継承されており、その概要を表1にまとめた。

1月1日お飾りを飾る。家の中には12の神様がいて、お正月を迎えるにあたり、12の餅を作り、これに幣束と藁で作った八丁締め、御神酒をお飾りとして供えた。12月31日に餅を搗いて、1月1日の朝供えることを決まりとしていた（注3）。12の神様のうち、母屋内に祀るのが大神宮様、鹿島様、オソウデンサマ（お祖田様）、厩大黒の神様、オカマサマ（お竈様）、オクリノデエノカミサマ、お正月様（年神様）、他で屋敷廻りでは天神様、お稲荷様、大黒様、氏神様である。この日には一渡地区の新年会が行われる。

1月の最初の卯の日はお正月様（年神様）が天に帰る日だとして、オタキアゲをする。男性が羽釜でご飯を炊き、羽釜ごと神棚の下にお供えする。

1月2日はノイリといって山に入って山の神様を拝んだ後、オッカドの木をとってくる。このオッカドの木を使って小正月に小豆粥を混ぜる箸、アワボヒエボ、刀、白などの飾りものを作る。

1月13日は秩父市上宮地にある虚空蔵寺の祭礼でお参りに行ってお札をもらい、だるまを買ってくる。お札はお蚕繁盛や家内安全祈願である。だるまはザシキとデエ境の中央の柱の前にザシキ側に台を置き、その上に飾り、作った寿司を一对の膳に載せ

てしんぜた。小正月飾りの一つとして飾っている。

1月15日は小正月で繭玉を作り家、屋敷の様々な場所に飾る。中心の繭玉はザシキ・デエ境の中央の柱に飾る。その前にだるまが1月13日に飾られる。繭玉の材料は米団子でだるま、鳥、白、杵、繭籠の形のものを作り、ボクと呼ぶ台木の枝にさした。繭籠の形とは丸い盆状のものを作りこれに小さな丸いものをたくさん載せた形である。繭かきの盆に繭を集めて載せた形なのであろう。ボクは柿の木で、年末から枝振りの良いところを探して用意しておく。写真2は内田家座敷に飾ってある以前の繭玉飾りの様子を撮影した写真を複製したものである。繭玉、虚空蔵様の他に多くの飾りがあるが、その内容は未調査である。この他に神棚、ご先祖様、蚕小屋、蔵、テントウバシラ、井戸、氏神様、天神様、便所、竈に繭玉をお供えした。この繭玉は丸い団子の形で梅の木の枝にさしてそれぞれの場所にお供えした。また、小豆粥を作り、1月2日のノイリの日にとってきたオッカドの木で作った箸で粥を混ぜ、その粥箸を田の苗間に挿す。オッカドの木の粥箸の形は、木の枝の先を四つに割り、間に繭玉を挟んだものである。他にオッカドの木でアワボヒエボと呼ぶ作り物をして、これを肥塚に挿した。14日に準備する繭玉飾りも15日の夜から16日にかけて、「メエカキしなくっちゃ」（繭を集めること）といって早々にかたづけた。これは米粉で作った繭玉が固くなるからだという。

1月20日は初恵比寿様である。旧暦11月20日朝に送り出した恵比寿様が夜帰って来るということで祭祀は夜行った。床の間に高盛りにしたご飯とお平（野菜の煮物）、生のさんま、香のものを供えた。旧暦11月20日は商売の神様の恵比寿様が仕入れに出発する日で、お金を持たせて送り出すのだという。これを朝恵比寿と呼び、1月20日には働いてお金を儲けて夜帰って来るのだといい、夜恵比寿とも呼ぶ。

1月24・25日は初天神で、天神様の祠の前に旗を立て、太鼓を出し、赤飯を作りお供えする。かつてはメイドン（舞殿）があり、この日に芝居や剣舞を披露した。

2月の巳丑と続く日の巳の日は天神のお稲荷様のお日待ちである。これは一渡地区の人が集まる大きな行事で、別に取りあげる。

2月3日は節分である。節分の行事として小正月に繭玉やアワボヒエボを飾ったところに、節分には「福は内」と唱えながらお祓いして歩く。神棚にお供えしておいた煎った大豆を、家の中で「福は内」として、外に出て便所、肥塚、蚕小屋、蔵、井戸まわりで「鬼は外」と唱え、再び家の中に入りアキの方（恵方）を向いて「福は内」と唱える。その後、あらかじめ作っておいたヤカガシを持って、ザシキ南側の障子を開け「鬼は外」と唱えながら縁に出て、テントウバシラに挿して行事は終わる。ヤカガシは大豆の木にいわしを刺してヒジロで焼いたもので、唾をひっかけながらヒジロの灰に挿

して焼く。ヤカガシはあらかじめヒジロで作る。

4月3日はお節句である。雛人形を飾り、お餅を搗いて供える。お餅は白い餅と草餅を重ねて菱形に切った形のものを作る。

4月13日はお寺（大慶寺）のお稲荷様祭りである。

5月5日は5月の節句で赤飯を炊く。真理子氏は祖父内田寵治郎氏が菖蒲を採ってきて神棚や屋根の前に吊っていたことを記憶している。

8月7日は七夕で、新子の竹に飾りをつけて、テントウバシラに飾った。このときはおまんじゅうを作り供えた。

8月13～16日はお盆で、ザシキとデエ境に先祖を迎えるための盆棚を作る。ぼたもち、お寿司を作り、野菜、切昆布とともに供える。

旧暦9月十三夜はおまんじゅうを供えた。十五夜は十五夜花、ススキ、栗、柿、豆、さつまいもを供えた。さつまいもは初めて掘ったものを供えた。

10月24・25日は天神様である。

旧暦10月10日はトウカンヤで、夜子どもたちが集まり、藁を束ねて藁苞を作り、家の前の地面を歌を唱えながら叩く行事。こどもにはお菓子がふるまわれ、これが子供たちの楽しみであった。歌は「とうかんやとうかんや、あさぼたもちにひるだんご、よるそばくったらぶったたけ」と唱えた。

旧暦11月20日は朝恵比寿である。供えるものは1月20日初恵比寿（夜恵比寿）と同じである。

12月29日は正月を迎えるためにお先達に幣束をきってもらう。幣束と八丁締めを作るのがオセンダツサマ（お先達様）と呼ぶ神官で、鉢形城の方の宮司とっていたことを真理子氏は記憶している。年末の29日に家に招いて幣束を作ってもらった。分家の分も含めて作ってもらった。内田家は鉢形城落城に伴いこの地に移ってきたという伝承があり、これとの関連も考えられる。オセンダツサマは同じように招かれて各地を泊まり歩いたようで、両神にも行っていると真理子氏は聞いている。泊まり込みで作りに来ていたオセンダツサマのところへ20軒の分家の人たちが、お盆にお初穂料を入れ、これを風呂敷につつんで持参し、かわりに幣束を入れて持って帰っていたという。オセンダツサマが来られなくなって、現在は中蒔田の棕神社で作ってもらっている。

以上が主な年中行事とその準備である。この中で特に住まいと関わり、飾り付けや集会に部屋が使われるのは小正月の繭玉飾り、天神のお稲荷様のお日待ち、お盆である。また、トオカンヤを過ぎればザシキに畳を敷きつめ、掘り炬燵をだしてもよいとされていた。春になると養蚕のために畳はふたたび片付けられた。

(3) 天神の稲荷様のお日待ち

天神の稲荷様のお日待ちは一渡で行われる行事で、地元では天神祭と呼ばれている。2008年2月23日に行われたお日待ちの様子を紹介する。内田家横を流れる蒔田川そばに祀られている、天神様・お稲荷様・大黒様の3つの祠のうち、天神と稲荷の祠に参拝した後、耕地の男士が内田家のザシキに集まりお日待ちが催される。お日待ちとは行事に関係する人たちが集まり楽しく歓談する時間を持つことをいう。

内田家の位置する下蒔田は一渡、赤田、竹の妻、森の地区（耕地）に分かれている。一渡は34世帯あり、その中はカミ（上）、メエヤマ（前山）、ホンケ（本家）、シモ（下）の4つの組合に分かれる。

カミとメエヤマが一つのまとまりになり、ホンケとシモが一つのまとまりになり、毎年一人ずつ二名の行事役を持ち回りで出し、お日待ちを行う。葬式組もこの二つの組のまとまりが一つとなっていく。2008年はカミの組合から黒沢国信（昭和10年4月14日生まれ）、ホンケの組合からは上原文利（昭和33年4月16日生まれ）が行事当番となっていた。午後から二人の行事によってお稲荷様へのお参りが行われ、お稲荷様を迎えて夕方からお日待ちが始まる。三々五々集まった人たちはヒジロ（シタノジロ）の火を囲んで開始を待つ。一渡には34世帯あるが、この日は23名が集まった。ザシキに長テーブルが出され、カラオケセットが用意され、お酒と仕出し弁当で楽しい一時がもたれる。カラオケセットはザシキ北側の間仕切り境に置かれ、行事、内田家当主の挨拶もこの位置から南側に向かって行われる。内田家の真理子氏と行事役が汁物のおかわりやお酒の燗付けといった給仕役として、ヒジロ（シタノジロ）のそばに控えている。

内田真理子氏はこの天神の稲荷様のお日待ちが終わると、やっと正月行事が終わった気がすると話す。

お日待ちは他にサントオヒマチ（産体お日待ち）、学校お日待ち、オトコシのお日待ち、バアサンデエのお日待ちがあった。サントオヒマチは子を持つ女性の集まりで、一渡地区の人たちが集まる。掛け軸をかけてお寿司を作りお供えした。母親が中心になって集まりを開いている。現在も続いている女性のお日待ちである。学校お日待ちは3月頃小学生と中学生とその親が集まって餅を焼いて食べるお日待ちである。オトコシのお日待ちもバアサンデエのお日待ちもサントオヒマチがあるから同じようなものを作ろうとして始められたが、現在は行われていない。お日待ちは何らかの信仰であったり集団のための集まりであるが、関係者の相互の親睦のために重要な役割を果たしていた。特に何らかの形で女性が集まるお日待ちが多く行われていた。そしてその集まりは現在は地区の集会所で行われることが多くなったが、集会所のない頃は各家々を持ち回りで廻り、ヒジロのまわりにあつまっての飲食歓談が行われた。ヒジロ

廻りは日常的な村の人たちの集まりの場所でもあった。

4、部屋の名称と使い方

筆者が訪れたのはすでに、文化財に指定され、隣接して新しい住まいを設けた後で、どのように暮らしがなされていたかを見る事はなかったが、内田家御当主の妻真理子氏が住まわれていたため、そのお話から推測することが出来る。

ダイドコと呼ぶ土間部分と床上部分のザシキとの境中央に立つ柱が男大黒、1間南側に立つ柱を女大黒と呼ぶ（写真3）。桁行きの柱間隔と梁行きの柱間隔が異なり桁行きはほぼ190cm間隔で柱が立つが、梁行きは南側の女大黒と男大黒の間が235cmと広く、その南側の柱間隔も同じ235cmであるが、男大黒から北側の柱間隔はこれより狭く、桁行きと梁行きでも違い、また、梁行きの南側と北側でも異なる。ザシキは板間で、男大黒より半間北側に間仕切りが設けられているが、これは後から加えられたもので、当初は一室の広間であったことが埼玉の民家に示された復元図からわかる（図3）。ザシキの西側にはデエ（トバノデエ）があり、その北側にはヘーヤと呼ぶ部屋がある。さらにデエの西側にはナカノデエ、その北側にはオクリノデエが位置する。土間側に目を移すとトボウと呼ばれる土間入り口を入るとダイドコと呼ぶ土間が広がり、正面にはヒジロが設けられた板間がザシキから延びている。床上と反対側のダイドコには元ウマヤが位置し角の柱をウマヤダイコと呼ぶ。ウマヤの北側には3連の竈、流しがある。

ザシキにはヒジロ（ウエノジロ）が切られ、近年は掘り炬燵として使用されていた。男大黒から半間北側の間仕切りは元々はないことは敷居が後補であることから明らかで、そのことは北側の部分の呼び名が無く、ザシキの一部として扱われていることからわかる。この間仕切りの位置に仏壇が収められている。もとは間仕切りがなかったとすると仏壇の所定の場所はどこであったか興味のあるところである。この地域では養蚕時には広い飼育空間を確保するために仏壇を移動していた例もあり、先祖霊の位置づけは検討の余地がある。ザシキとデエ境の南側、縁に立つ柱をテントウバシラと呼ぶ。太陽が一番先にあたる柱だからこう呼ぶといわれている。正月の松飾りや小正月に繭玉を供える。ザシキ南面の縁は半分の幅に欠きこまれており、普段の客は縁のこの位置に座り、話をし、お茶を飲む。この場所はチツチャイエン（小縁）と日常呼ばれ、お駕籠が入れるように切り欠いたのだとの伝承がある。いいお客様はこの位置から家の中に入ったことを真理子氏は記憶している。

デエのヘーヤ境には押板が設けられている。すなわち南面して設けられているが、復元によると、押板はザシキとヘーヤ境に設けられており、建立後移動したと考えられる。秩父地域では押板、神棚は南面して設けられ、接客時の上座も南面して設定さ

れる傾向があり、今後の解体修理による詳細な分析が期待される。

葬式の時はおクリノデエに祭壇を作り、参列者が多いとナカンデエからデエ（トバノデエ）へと L字型に使った。出棺はナカンデエの縁から行われた。

氏神は母屋の北西、柴小屋の近くに祀られている。屋敷から少し離れたところには一渡地区の鎮守といえる天神様があり、同じ場所にお稲荷様・大黒様が祀られている。母家の中はザシキとデエ、ザシキとヘーヤ境に神棚が設けられており、皇大神宮、鹿島様、だるまが祀られており、正月にはお正月様を迎えて飾る。ザシキとデエ境の柱近くには小正月の時に繭玉を飾り、だるまを飾る。

ザシキの北側の柱にはオソウデンサマ（お祖田様）が祀られる。これは田の神様だと伝えられている。オクリノデエの床にはオクリノデエノカミサマを祀る。ナガシの上にはオカマサマを祀る。

5、養蚕と母屋

江戸時代の終わり頃建てられたと推測される内田家は、母屋を養蚕のために使うことを考えたかたちであった。中二階を縁の上にまで張り出して空間を広くとり、明かり取りと通風のための障子を設けた。1階も養蚕時には畳をあげて板間とし、ほとんどの部屋を飼育場所とした。使わなかったのはオクリノデエとヘーヤだけであったという。ナカンデエが掃き立てから行う養蚕の中心的な場所であった。ナカンデエは小さい部屋であり、掃き立てから行う際に使い、すきまに目貼りをし、レンタンで暖房しながら育てた。神棚廻りには中二階は設けられず吹き抜けとなっていた。上蔭前には家中が蚕の飼育場所になった。その時の寝場所はオクリノデエ、ヘーヤであったが、給桑に忙しく働き、ザシキとダイドコ境のアガリハナあたりの蚕座の間に寝ることもあったという。最盛期には1トンの繭を出荷していたという。1トンを貫に換算すると270貫で、秩父地方では、100貫蚕はお大尽といわれたほど、100貫をとる事すら大変であった。養蚕は広い空間と集中的労力提供が必要な産業であり、広い桑畑と、飼育空間及び人手がないと大規模な養蚕はできなかった。

6、住まいに込められた役割

埼玉県の民家であって草葺き中二階型養蚕民家の白眉といわれる内田家はその雄大でかつ落ち着いた印象を与える。本論文ではその空間の中身について見てきた。建築的な構造、間取りを理解した上で、どう人が住まいを認識し、行動してきたか明らかにしてきた。そこで分かったことは、養蚕は工場といってもよい空間と労働力を必要とした産業であり、そのための住まいの形であったこと、及び人が住まう場として12あるといわれる様々な神、先祖と一緒に住んでいたことである。信仰の形は少しずつ

省略されつつあるが、幸いに年中行事として、耕地（地区）及び、家で継承されている。年中行事を聞く中に出てきた神様を表2にまとめ、その位置を番号で図1の屋敷取り図と図2の母屋間取りに示した。正月飾りと小正月の繭玉飾り時に多くの神が祀られることがわかる。母屋内にも農作業の空間である屋敷周りにも多くの神が祀られることが具体的にわかる。正月、小正月を中心とした年間の儀礼を通して、住まいの各場所、柱の役割が明らかになる。内田家ではザシキを中心として様々な神が住まい、家を見守っていたのである。家族は年間の行事を行なうことによって具体的には飾り物を作り、料理を作り、また人が集まり、語らうことによって、毎年、神々を確認し、伝承しているのである。また、社会に開かれた接客空間が内田家には作られ、冠婚葬祭の空間として確保されていた。

どうして養蚕工場といってもよい飼育空間を人の住む母屋に設けなくてはならなかったのかの疑問が浮かぶが、それは「お蚕さまはお子さま」という言葉に集約される（注4）。人の子を育てるように大切に育てるという気持ちが根底にあったからで、またそのような気持ちで臨まないで育てるのが難しい虫であった。養蚕をするための大変な苦労と、生き物を育てる喜びの両面については改めて書きたい。

謝辞

内田家ご当主夫妻には大変お世話になりました。また一渡耕地の方々にはお日待や養蚕の見学の際、温かく接していただきました。お礼申し上げます。

参考文献

1. 新編武蔵国風土記稿、第十二巻、大日本地誌大系^⑩、雄山閣、1996
2. 埼玉の民俗、埼玉県教育委員会、1966
3. 埼玉県の民家－埼玉県民家緊急調査報告書－、埼玉県教育委員会、1972

注

- 注1. 埼玉県の民家－埼玉県民家緊急調査報告書－、埼玉県教育委員会、1972、11・12頁
- 注2. 前掲書注1、85頁
- 注3. この中でお正月様の飾りとして、柿、栗、昆布、するめ、鮭（鱒）、かぶ、みかん、小魚、手拭い、紙半畳、フキマワリ（紙風船）、お金を吊して供えた。写真2参照のこと。
- 注4. 真理子氏は、この言葉は知らず、「天の虫だから大事なものだ」と聞かされていたという。

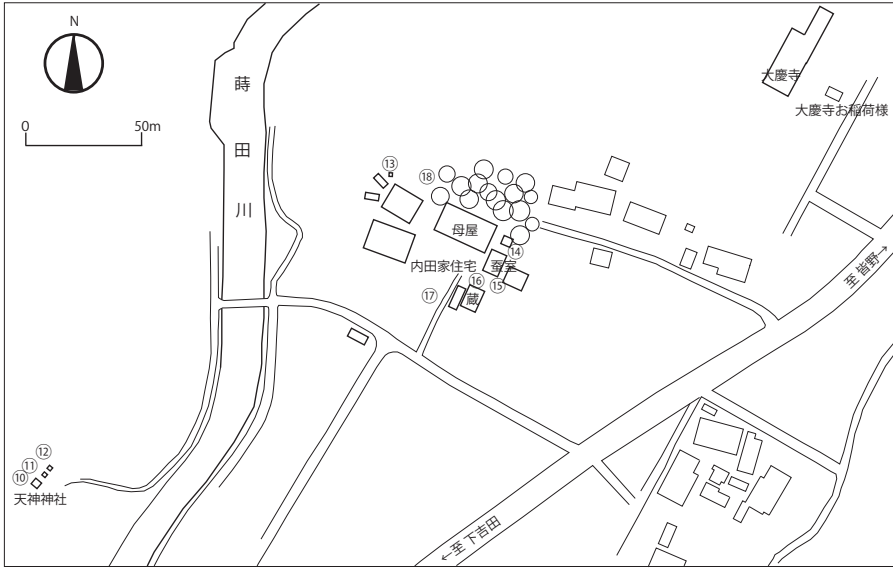
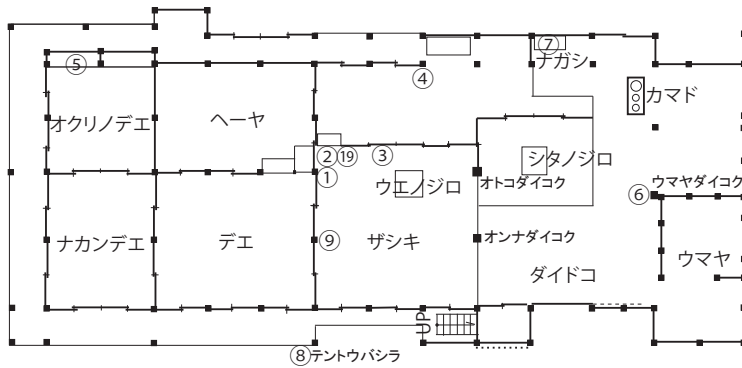
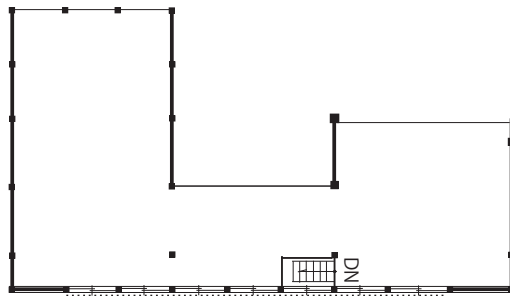


図1 内田家屋敷取り



一階



中二階



図2 内田家平面図

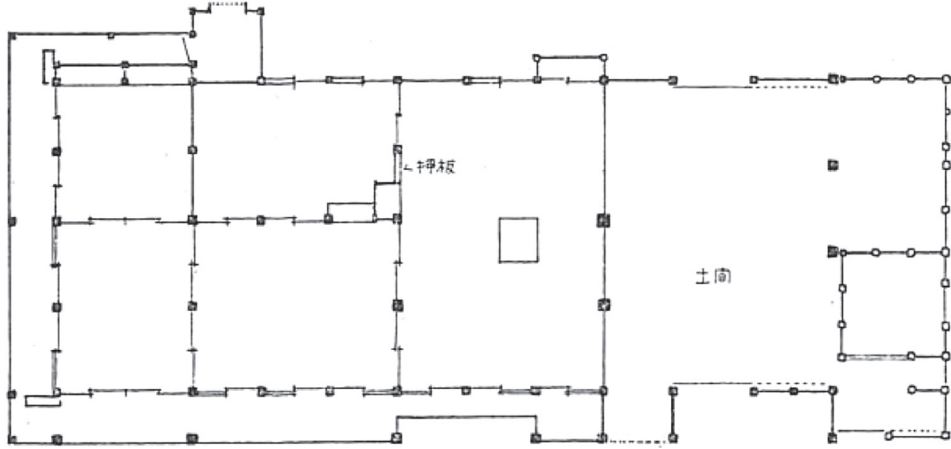


図3 内田家住宅 復元図

表1 内田家の祀る神

		お正月飾り	繭玉飾り
①	大神宮様	○	
②	お正月様 (年神様)	○	
③	鹿島様	○	
④	オソウデンサマ (お祖田様)	○	
⑤	オクリノデエの神様	○	
⑥	ウマヤダイコクの神様	○	
⑦	竈神様	○	○
⑧	テントウバシラ	○	○
⑨	虚空蔵様		○
⑩	天神様	○	○
⑪	お稻荷様	○	
⑫	大黒様	○	
⑬	氏神様	○	○
⑭	便所の神様		○
⑮	蚕小屋		○
⑯	蔵の神様	○	○
⑰	田畑		○
⑱	肥塚		○
⑲	ご先祖様 (仏壇)	○	○

表2 内田家の年中行事

日にち	年中行事	行事の内容
1月2日	ノイリ	山に入って山の神様を拝んだあと、オッカドの木を採ってくる。オッカドは小正月の飾りものを作る。
1月13日	虚空蔵様	秩父市上宮地にある虚空蔵寺の祭礼。拝みにいってだるまとお札をもらってくる。お札はお蚕繁盛や家内安全を祈願するものである。買って帰っただるまは座敷中央の柱の前にテーブルを置き、その上に飾り、一對の寿司を膳に載せてしんぜた。
1月15日	小正月	だるまの後にはボクと呼ぶ台木に米団子をさした繭玉を置いた。ボクは柿の木、家の中に進げる繭玉の木は梅の木を用いた。しんぜるところは神棚・蚕小屋・蔵・天とう柱・井戸・氏神様・天神様・便所・竈であった。ボクに挿す米団子の形はだるま、鳥、臼、杵と繭籠の形のものをつくった。梅の木に挿す団子の形はだるま、鳥、臼、杵であった。ノイリで採ってきたオッカドの木で先を四つに割って間に繭玉を挿した粥箸を作り、これで小豆粥を混ぜ、後に田んぼの苗間に挿した。また、肥塚にも別の作り物を作り挿した。百姓のことがうまくいくように祈る。
1月20日	初恵比寿様	夜恵比寿様が帰ってくるということで、祭祀は夜やった。床の間に、ご飯を高盛りにして供えた。
1月24・25日	初天神	赤飯を進ぜる
2月巳午の巳の日	お稲荷様のお日待ち	
2月3日	節分	
4月3日	お節句	
4月13日	お寺のお稲荷様まつり	
5月5日	5月の節句	赤飯を炊く特別な日と思っていた。おじいさんは菖蒲を採ってきて神棚や屋根の前に垂らした
8月13～16日	お盆	盆棚を作る
旧暦9月13・15日	十三夜・十五夜	
10月24・25日	天神様	
旧暦10月10日	とうかんや	モグラたたきのことか。夜に子供たちが集まり、家の前を作った藁縄で地面をたたきながら歌を歌った。そうするとお菓子がもらえた。「とうかんやとうかんや、あさぼたもちにひるだんご、よるそばくったらぶったたけ」と唱える歌であった。
旧暦11月20日	朝恵比寿	恵比寿様が仕入れに出発する日で、お金を持たせて送り出すということで、朝に祭祀を行った。朝恵比寿といった。



写真1 内田家母屋



写真2 昭和60年頃の小正月飾り（内田家所蔵写真）
手前に吊り下げられているのは正月様の飾り



写真3 ザシキからデエ、ナカンデエを望む